

# 知床半島における中小型哺乳類の生息状況について —外来生物のモニタリングのために—

知床森林生態系保全センター 清水 晴彦

## 調査概要

### 背景・目的

2009年に道内の野生生物観測ネットワークの一環として開始し、その後「知床世界自然遺産地域長期モニタリング計画」の調査項目として、**①外来生物の侵入状況のモニタリング**、**②哺乳類の生息密度の変化の相対的な推測**を目的に調査を行っています。

### 調査方法

斜里側と羅臼側<sup>※1</sup>の2ヶ所に、それぞれ夏期と秋季において2ヶ月ずつ<sup>※2</sup>林道沿いの立木にセンサーカメラを設置し、撮影データを収集しています。



※1 羅臼側は2013年より調査開始 ※2 夏季:斜里6月、羅臼7月 秋季:斜里10,9月、羅臼9,10月 カメラ設置の様子

## 調査結果・考察

### 全体結果

- ✓ 2009～2022年の調査で全30種（哺乳類:15種、鳥類:15種）の動物が確認され、最も高頻度で撮影されたのはエゾシカでした。その他にキツネ、タヌキ、ヒグマ、エゾリスなどが確認されました。
- ✓ 外来生物は、低頻度ですがアメリカミンクとアライグマの2種が確認されています。
- ✓ 知床では北海道計画の地域版として「知床半島エゾシカ管理計画」・「知床半島ヒグマ管理計画」を策定してエゾシカとヒグマの独自の管理を行っており、今回の発表ではエゾシカとヒグマの生息密度の変化について考察することとしました。

### ① 外来生物の侵入状況

表1 外来生物の撮影枚数 (単位:枚)

種	調査地	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
		アメリカミンク	斜里側 0	0	0	0	0	0
	羅臼側	—	—	—	—	—	1	0
アライグマ	斜里側	0	0	0	0	0	0	0
	羅臼側	—	—	—	—	0	0	0

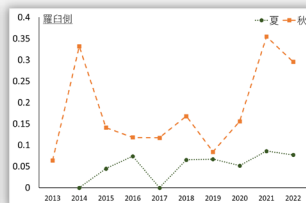
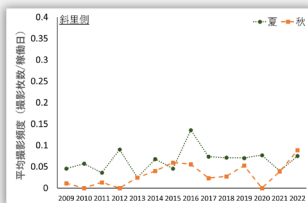
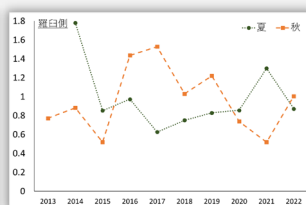
種	調査地	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
		アメリカミンク	斜里側 2	0	0	5	5	2
	羅臼側	1	0	1	2	1	0	3
アライグマ	斜里側	0	0	0	0	0	0	0
	羅臼側	0	0	0	0	0	1	0

■:本調査での初確認年

- ✓ 初確認以降は定着による継続的な撮影が予想されますので、今後も状況を注視していきます。



### ② 哺乳類の密度変化



- ✓ 秋季の調査では、ヒグマの密度が上昇するとエゾシカの密度が低下する傾向が見られています。これはヒグマの活動が活発になるにつれ、エゾシカが別地域へ移動したためだと考えられます。
- ✓ 2020年秋季の羅臼側からヒグマの撮影頻度が上昇傾向になっているのは、設置時期を10月から9月に変えたことで、付近の河川におけるサケやマスの上遊数が増加したためだと考えられます。
- ✓ 夏季の調査結果において特に関連は見られませんでした。

本調査ではカメラ設置期間および設置台数が年によって異なるため、撮影枚数/稼働日によって算出された撮影頻度の値を、その年の設置台数（5～7台）で割った平均撮影頻度と比較しています。

## 今後の展開

- これまでの調査地点は斜里側羅臼側ともに遺産地域外となっていますが、外来生物の生息域を把握するために今後は新たに遺産地域内での調査も検討していきます。
- 来年度以降も引き続き調査を継続しながら、調査結果と他の調査データとの照合などを行い、生息密度に影響を及ぼす条件等についてより正確な結果の分析を行っていきます。